

朝鮮を離れることを決意し、一九三六年、東京へ、脱出する。彼は正式に結婚もし、東京で人生の再出発をすることを考えたのだろうが、東京到着後わずか半足らずで思想嫌疑により警察に拘禁されてしまう。別に抑立運動をしたわけでもないが、日本官憲は少しでもうさん臭い人間はかた一端からつかまえていたのだから、外見からして一風走っていたという李箱は、そんなところから捕えられてしまったのかも知れない。一九三七年三月、病氣保釈となった時には既に瀕死の状態で、その一ヶ月後に死亡している。

李箱の作品は難解だという話をよく聞くので、朝鮮語で読みはじめたばかりの勇氣もなく、私の部屋には二冊の作品集が殆んど頁を開かれないままに置いてある。たつたひとつしかも日本語でしか彼の作品を読んではないのだから偉そうなこともいえないが、飛ぼうとして結局飛べないままに死んでいった彼は、生涯、朝鮮の歴史風土と、その時代を最も悲惨な形でひきずってしまった人の一人だったような気がする。

(本)

韓国の人間像 文学芸術家編 新日文化社
季刊「三千里」一九七七号春 才九号

「李箱の没後」 長壽吉

(木)

川むくげの会の近況報告

歴史研究会は昨夏より、「現代朝鮮史」をテーマに会をもっている。約半頁の予定だったがまだ半分を少しまわったところだ。すでに発表の予定のものはいくつかあり、(一)一九五〇年までの南朝鮮政治史、(二)北朝鮮経済略史、(三)解放後南北の土地改革、(四)解放後朝日関係史、(五)朝鮮戦争略史、(六)南朝鮮帝制研究、です。今後(七)南朝鮮学生運動、(八)日韓条約を韓国側より見る、(九)李承晩時代、と続く予定です。興味のある方は神戸学生青年センターで毎週火曜日七時からやっていますので、どうぞ。

朝鮮語の方は、学生センター主催の朝鮮語講座の拡充に伴い、むくげの会のクラスを解散し、センターの初中上級クラスにむくげのメンバーもちらばっています。初級は一人の参加を得、毎週金曜日に、中級は毎週月曜日、初級から進級した人に留置した人を加え八人で、上級は毎週水曜日進級組、転入組、残留組五人で今「文学と知性」所収「小人が打ちあげた山でなま」というソウルのパラック撤去をとりあげた小説を訳しています。

へ移動、山根が転場変更、黒田がやっと就任、七夕がついに結婚。